

第1章 双極の

爪痕

1・1

(1)

私たちの生活は——それほど変わらなかった。

「もうすぐ春休みですねえ」

私たち二人と、アヤメの仲はすっかりよくなって、いまはこうして、一緒にお昼

ご飯を食べられるぐらいになっている。

「そうね。まだ貴方達は一年だからわからないと思うけど、春休みは死ぬほど退屈よ」

「そうなんですか？ 春休みなんてすぐ終わる、って感覚しかないんですけど」

「そうそう、中学校の時なんてそうだったよねー」

「この春休みは一ヶ月以上あるの」

「一ヶ月！」

「そうよ。それに、宿題も多分一年生のときは大して出ないから、本格的にやることないわよ」

「自分のやるべきことを、見つけろってことですかね」

「一応、自主学習しろとか言われるけど、

私はやらない」

「そうですよ、勉強なんて面倒くさいだけ」

「そんなこと言ってるから、セレナはテストで点取れないんだよ」

「赤じやないから、いいの」

「セレナ、油断大敵よ。いまはまだいいかもしれないけど、二年はもつと厳しくなるわよ。実際に落ちるときは落ちるから。取れる点は取っておくべきよ」

「うっ、はい」

私たちの会話は、なんら普通の人間と変わらない、他愛のない日常の風景だった。

初めての狩り、あれからすでに二ヶ月ほど経ったが、その後の狩りは両手で数え切れるほどしかなく、どれもまた最初

の獲物と多少大小する程度のことを相手にするだけで、私たちが出会った一番最初の悪夢、あの恐怖の塊に比べれば、可愛いものだった。

だが、経験は溜まっていった。私たちはアヤマから狩りの手ほどきを受け、今やそれなりの狩人になったと思っている。

睡眠学習とはよく言ったものだが、本当に、狩りの夜に学んだことは、たとえばそれが一度だけでそれも眩き程度のものであっても、一語一句覚えていくのだ。きつとこの夜に勉強できたら、どんなにいいだろうか。まあ、そんな余裕はないのだが。

しかし、狩りの夜から目覚めても、不思議と疲労はない。私はよく勉強疲れを

するタイプで、暗記する時には顕著なだけでなく、狩りの学習に、倦怠感を伴ったことは一度もない。むしろ、目覚めはよく、頭の中が綺麗さっぱり洗い流されている。だるさはなく。それは生理のときもそうだった。精神的な満足感によるものだろうか。それもまた、私たちが狩りの夜に馴染んでいくのに、大いに役立った。

今や狩りの夜は、現実の私たちに大きな影響を持つ。自信が伴うのだ。無力感に打ちひしがれて、未熟な自分を抱えていたあの時と、夜に紛れ人々を救い、だがそれは誰にも知られずに、しかしそれでいいのだと満足するヒロイズムに酔う私たちは、姿勢が全く違う。

華やかさを求めるのも、その一つなのだろうか。

「そういえば、アヤメさんって次から私服でしょう？」

セレナは特にそうだった。

「そうだけど、セレナには関係ないですよ」

「ありますよ！ アヤメさんなんかそういうのガサツっぽいから」

「そう？ 私ってそう見えるの？」

私に求められても、こう答えるしかない。

「はい……見えます」

待ち合わせ場所に学校の体操服であるジヤージ姿で現れたときには、さすがに彼女の装いへの無頓着さを実感しなければならなかった。

「そう……まあ確かに、服なんて買ったことないからね」

「自分で買ったことないんですか？」

「だって着ないから。外に出るのは学校かバイトだけだから」

「これは、重症だなあ……」

「でも流石に、四年生で制服は」

「そうよね、ただのコスプレよね」

「じゃあ！一緒に買いに行きませんか？」

「いつ？」

「春休みのどこかで」

「買い物に行く服がないんだけど」

「春休み中なら、まだ制服でもオーケーですよ！」

「ええ、セレナそれは……」

「それもそうね。まだ『三年生』の春休みだものね。いいわ、どうせみんなやることないんでしょう。付き合いなさい」

「はい！」「わかりました」

「断っておくけど、私のセンスは壊滅的よ」

「……わかってます」

「任せてくださよ！私がしっかり、コーディネートさせてもらいます！」

後は、具体的な日目を打ち合わせて、それからまた違う話題に移り変わっていった。

(2)

彼女の言う通りに、春休みは瞬く間に過ぎ去っていった。冷蔵庫の横に貼って

ある、新聞販売店の配るカレンダーを見ながら、すでにこの長い休みの半分近くを消費した事実に気づいた。三月の半ばだった。

それに、何かに打ち込んだりもなく、そもそもの勉強すらままならず、怠惰な一日を過ごしていくだけの現状。狩りの夜も、めっきりで刺激に欠ける。

眠たい時に眠り、起きたい時に起きる生活は、いずれ社会からの孤立を自覚させる。椅子にだらしなく座って、ただぼーっと天井を見上げるとき、私はそう感じざるを得ない。

お昼を食べようと、二階に降りたが特に動いてもいらないので、用意された分だけのごはんは必要ないと言えない。

それでも残すのはどうかと思うし、いつも食べ切るがそのせいで最近では若干太りつつある。尤も、量を減らせと言えばいいのだが、それすらも面倒なのだ。受動でいる日々に慣れきって、いつの間にか行動すること自体を回避するようになる。今の私の日課は、動画を見ることだけだ。ゲームすら、疲れる。

そんな日々が続くと、忙しい忙しいと嘆いていた、学校が待ち遠しい。勉強がしたいわけではない、友達と会いたいのだ。誰かとまともな会話をしたいのだ。

あ、そうだ。

明日が約束の日であることを思い出した。ちよーどいい。久しぶりに友達と会えることに、私の心は踊る。

早急だろうが、私は明日へ向けた準備を始めた。

着ていく服を選んで、バッグを用意して、財布を確認したり、久々の労働だ。

やはり何かに向かって運動することは、人生に必要なことであると、私は改めて実感した。

(3)

「あ、こっちこっち！」

セレナが遠くから手を振ってくれた。人混みは激しくて、なかなかたどり着けない。ひと目をそれなりに気にして、わざわざ平日に設定したのだけれど、大して効果はなかったようだ。学校でもないの

に制服だなんて。恥ずかしい。流れをかき分けて、私はやっとたどり着いた。

「おはようございます」

「おはようカナン！」

「おはよう」

「みんな早いですね」

「電車の時間がこれしかないから」

「私も、バスがね」

「そうなんだ」

待ち合わせの時間は二十分ほど後だったが、全員揃った。私は歩いて来れる距離、というか駅前なので、ほぼ駅と等しい距離だったのだが、こういう場合はいつも、時間よりも早く来てしまう。時間の見積もりがいつもより長くなってしまふのだ。幸い今回は二人とも居てくれたので、一

人で待ちぼうけする必要はなかった。

以前私はアヤメが自分で服を買いに行ったことがない、ということに大して、若干の驚きを感じていた。けど、よくよく考えると私も自分の意思で行こうとなったことは、あまり記憶にない。つまり、今回のショッピングモールに服を買う目的で入ったことは、一度もないのだ。この中で慣れているのは、セレナだけ。私とアヤメは、両親の後ろに縮こまって付いていく子供のように、セレナの後を追った。ヤング・レディース向けの階に到着した。エスカレーターに乗っていたが、私たちのように制服でいる女性は一人も見かけなかった。

「あ、ここ」

セレナが指を指した。

「私いつもここで服を買ってるんですよ」
その店で売っている服は、カラフルなもので、いかにもおしゃれ系な女性たちに人気のようなものだ。

「はあ、こういうのってアヤメさんに似合いますか？」

私は本心だった。

「似合うって。ほらアヤメさん、何か好きなを選んでみてくださいよ」

「う、うん」

明らかに困惑している。彼女でも、自分にこの系統の服装が似合わないことを理解しているようだった。

「似合わない」

結局、この店で探すのは諦めることにし

た。

「いいとおもったんだけどなあ」

さすがのセレナも難儀しているようだった。次の店はアヤメが選ぶことになった。私とセレナは彼女にたづいていくだけ。

「ここ」

彼女が見つけたのは、言い方が悪いかもしれないが、まあ当たり障りのない大手の売り場だ。

「ここですか？」

どうしてこんな場所で、と言いたげなセレナ。

「ほら、アヤメさんがここって言うんだから」

私は突っ立つ不動のセレナを押す。

「これどうかな」

「地味、じゃないですか」

「私はいいと思いますよ」

「だめ。絶対ダメです。そんなじゃ婚期を逃しますよ！」

「まだ二十歳ですらないのに、そんなことを考える暇はないわよ」

じゃあこれで、と彼女はレジに向かうとする。

「ちょっと、試着しないんですか？」

「別にいいかなって」

「それこそ本当にだめですよ。ちゃんと来てみないと」

「サイズは合ってるし、既製品だからどれも変わらないわよ」

私たちがちょっかいを出したばかりに、彼女は躍起になったのだろうか。手にとつ

た服の、色違いや柄違いを適当に選んで、会計を通してしまった。

「本当にそれでいいんですか？」

「いいの。二着あればローテーションには十分でしょ。三着あるから、洗濯が間に合わなくてもバックアップがある」

「無地とストライプと水玉って……」

「十分よ。読めない英文を着飾ってるより、よっぽどマシ」

「……そうですか」

返す言葉はなかったが、まあ、彼女は最低限地肌を隠せればそれでいいのだろう。それに、どれもまあまあ似合いそうだ。彼女の端正な顔が、逆に強調されるかもしれない。

「よし、じゃあお昼食べましょう」

「もうそんな時間ですか？」

「ほんとだ、丁度十二時だし、いこうよ」

「確か上にたくさんあったはずよね」

「はい。六階です」

「じゃあいこ」

セレナはさっぱりアヤメのファッションに興味をなくしてしまったようだ。彼女の意思を曲げることは、誰にも出来ないだろう。

「何食べます？」

エスカレーターを登りながら、下の方向から聞こえる声に答える。「なんでもいいわよ。あなたたちが選んで」

「カナンは？」

「私もなんでもいいかな」

「ええー逆に困るなあ。……じゃあなん

か良さそうなところで」

ショーウィンドウのサンプルを品定めして決める、ということだ。それでいいだろう。

「ここは？」

「これおいしそう」

セレナはハンバーグのサンプルを指さした。その他にもオムライスやスパゲッティなど、いろいろある。洋食のレストランだ。

「ここでもいいんじゃない」

最終的な決定権は、アヤメにあった。一応年長者でもあるし、当然だろう。私たちは店の中へと入っていった。

「これ見てもええますか？」

セレナは自分の携帯をアヤメに渡した。

「なにそれ」

私が聞いてもセレナははぐらかす。仕方なく私は注文したハンバーグを——セレナと同じものだ——口に運んでいた。

「ふーん。こんなもので、集まるとは思わないけど」

「何なんですかそれ？」

彼女のを見せてくれたのはSNSのアカウントだった。

「悪夢実体験……」

それは自らの見た悪夢の叙述をしているアカウントだ。

「なにこれ、中に私たちのじゃん」

「そうだよ。だって私が作ったもん」

「これセレナが？」

「うん。これでさ、私たちみたいに悪夢

を見てる人を探すの」

「でも……」

このアカウントをフォローしている人数は十人に満たなかった。

「これじゃあただの雑談ネタ供給じゃないの」

「ついこのあいだ作ったばかりだし、これからだよ。絶対来るって」

「その可能性は低いでしょうね」

アヤメは断言した。

「でもでも、可能性はあるんですよ」

「まあ、低いけど」

「じゃあもしそれで見つけれられたとしても、どうするの？」

「それは——」

彼女は答えなかった。こんなことをした

のも、ある種の好奇心なんだろう。ある

程度物事に慣れれば、それ以上を求めようとする。自分の能力に関係なしにだ。

それは私も同じだし、だからこそ慎重さに欠けると思った。いざその方法で悪夢を見る人を見つけれ、それが私たちの手に負えない存在であつたらどうするのだろうか。

「カナンもきつく言わないで。セレナは、セレナなりに方法を考えたのだから、まずはそれを評価してあげようか」

「それはそうですけど」

「お願い！ もうちょっとだけ続けさせて」

「ほら」

「わかった」

「ありがとう！　なんか見つかったら連絡するから」

セレナは満足げだが、私とアヤメは猜疑心に溢れていた。本当にそれが、私たちの行動に結びつくのか。

だが結果は、すぐにわかった。

(4)

「それ本当なの？」

休み時間、セレナが押しかけてきた。

「本当だって！　今日直接会いたいって言ってるの」

「ここぞ？」

「うん」

「ええ……」

私は急いでいた。次は移動教室なのだ。

それに春休み明け最初の授業日で、慣れてもない。クラスメイトもあたふたしている。二年生になって初日。とにかく忙しいのだ。

「わかったから。後でいい？」

「いいけど、ちゃんと来てよ！」

「わかってる」

私はセレナを置いて走った。幸い遅れることもなく——正確に言えば間に合わないかったが、先生が寛容だったのだ——二コマ目の授業が始まった。

「ねえ、もう一回聞けど、それ本当なの？　誰かのイタズラとかじゃないの」
「違うって絶対。文がそれっぽいもん」

「文章ぐらい誰だって書けるよ」

「もう、信じてよ!」

彼女が言うには、春休み中に始めたあのアカウントに、直接学校で会いたいというメッセージが届いたというのだ。それも、自身の夢について相談したいという。

セレナはそのアカウントで、『自らも悪夢を見て、それをある方法で解決した。その方法をみんなにも教えたい、相談に乗りたい』というスタンスで振る舞っていたようだ。そして運良く、臨んでいたものが舞い込んだ。そう信じたい。

「ねえどこにいるの?」

「私たちと同年らしいから、どっかさこらへんにいると思うけど」

そんなことを言われても、時間は昼休み

だ。それに春休み明けだから、久しぶりの友達と会えて嬉しい、という人間がわんさか溢れかえっている。いつもより活気のある状況だ。こんな人でごった返した廊下の、どこにいるだろうか。

「あ、あれそうじゃない」

私は人を待っていそうな、と言っても完全に私の決めつけだが、そんな女子を発見した。冷水機などが置いてある、小さいホール。その片隅に立っている。

「あれだよ。一人ぼっちで立ってますって書いてあるから」

早とちりかもしれないが、まあいい。私たちは彼女に話しかけた。

「あの? あなたが連絡くれた……」

なかむらもえ
「中村萌です。はじめまして」

大人しめな少女だ。ショートボブの髪型と

彼女の可愛らしい小顔は親和性が高い。

「私は時国瀬玲奈。でこつちが」

「詠華南です」

「どうも……よろしくおねがいします」

「それじゃあちよつと移動してもいい？」

「はい、いいですけど——どこに？」

「食堂」

「わかりました」

「あ、お昼とか大丈夫？」

「大丈夫です。私寮生だから」

「ああそう。え、でもそれじゃあ尚更じゃない？」

「はい」

「まずいので食べないんです」

「昼食抜き？」

「はい」

「はーよくもつね」

「ほら、セレナイこう」

「ああ、ごめんごめん」

私たちは食堂に移動した。途中同じ建物の二階にある、購買に一度よつた。昼食抜き、といつても全く食べないわけではないようだ。それにしても、私からしたら少ないとしか言えないのだが。彼女は菓子パンを一つ買ったただけだった。

「私は架谷彩芽」

「私らの先輩ね」

「……よろしくおねがいします」

私とセレナは隣り合わせに、モエとアヤ

メは私たちの向かいに座つた。

「それじゃあ、単刀直入に聞かせてもら

うけど、あなたの見た悪夢はどんなもの

だった？」

初対面の人間に、いきなり夢といった極めて個人的な事柄を打ち明けるのは、相当な負担を強いるだろう。それでも、彼女がそれを望んできたのだから、何かあるはずだ。私たちは彼女の言葉に耳を傾けた。しばらくは無言だった。きつと話の内容を整理していたのだろう。彼女はゆっくりと話し始めた。

「夢ってというか、妄想ってというか、その――変に思わないでくださいよ――

私、好きな人いつも寝てるんです」

「寝てるって？」

「夢の中ですよ！ 現実じゃないですよ、で――」

「あの、寝てるって、どういう？」

私はマズい質問をしてしまったと後悔した。モエは口を噤んでしまった。私は本当に、彼女の『寝ている』という意味を厳密にしたかっただけだということを、念押ししようとした。決して下世話な気持ちはないのだと。

「あ、あの、ごめんなさい。本当に変な意味じゃなくて、その、しっかりしておきたいというか――」

「やってるんです！」

彼女が叫んだ。幸い、周囲のざわめきに吸収されて、その声は私たちの範囲に留めることが出来たらしい。

「恥ずかしがる必要なんてないわよ。私だってそれぐらいある」

だから続けて、とアヤメはモエの背中を

さすった。アヤメの落ち着きは、彼女の鎮静剤にもなったようだ。私は胸をなでおろした。

「その、あの、やってるんですね。それで、それがすぐリアルで、あそこに書いてあったみたいな」

私たちの体験を指しているのだろう「すごく幸せで、気持ちよくて、寝るのが楽しかったんです。その夢を見るって言うのが、次第に人生の意味みたいになっていて。私、前はすごく遅かったんですよ、寝るのが。でも年明けぐらいからは九時前に寝るのが普通になって、しかも起きるのも遅くって、寝坊が当たり前というか。だけど、最近怖くなってきたんです」

彼女は言葉を詰まらせた。

「怖いつて、なにが？」

「首を……」

「首？」

「首を締めてくるんです。それが、すごく怖くて」

「殺そうとしてくるってこと？」

彼女は首を横に振った。

「わからないんです。苦しいって言ったら、離してくれることもあるし。だから、それが嫌で」

「どんな風に締めてくるの。状況を教えて？」

「あの、私の夢、リアルって言いましたよね。本当に細かくて、いきなり始まるってわけじゃないんです。ホテルに行くと

ころからとか、家に入るところからとか、同棲してごはんを食べ終わってからとか、だからテレビを見てたりとか」

「それはわかったから」

「あ、ごめんなさい。それで、彼は優しいんです。いつも私の嬉しことをしてくれる。——なのに、最近は違って、いきなり押し倒してくるんです」

「なにそれ、怖い」

「ですよ。それで、最初はふざけているのになって。男の子ってそんなことしなくなるのになって、思ってたんですけど」

「耐えてたのね」

「え……あ、そうです。でもそれもキツくなってきた、なんだか本気になって首

を締めてくるというか」

彼女は明らかに現実と夢の垣根を取っ払っていた。彼女の言葉の明瞭さは、もはや夢の記憶の範疇を逸脱していた。妙に現実味を帯びた彼女の語りに、私は引き込まれていく。悲しげな、行き詰まった顔だ。彼女にとって、夢の中の彼が豹変した事件は、いまここにいる私たちよりも、よっぽど関心の高い事柄なのだろう。

「それで？ 首を締められるってどんな感覚なの？」

ただアヤメは違うようだった。彼女はあくまで冷静に、どこか一つ高い領域から私たちを見下ろしているような物言いだ。彼女のところどころ迷走する話を、なんとか矯正しようとしている。

「真っ白になるんです。眩しくて、苦しくて、でも、でもいつの間にか気持ちよくなるんです。もうこれ以上明るくならない、っていう風になったら、心の底から幸せがじわじわ染み出してくるっていうか。それで、気づいたら目が覚めてたって感じで、いつも終わるんです」

「でも今日は違った」

彼女は驚いたようだ。秘密を暴かれた様な、自分の領域を侵されたという恐怖心を顕にした表情。

「なんで、それ」

「包帯が見えてる。新しい」

彼女はそのことについて、端から話すつもりはなかったようだ。隠し通せない、と諦めて澁んだ声色。

「——今日はただ苦しかったんです。

首の閉まる音って、わかります？聞こえるんですよ。ほんの小さな隙間から、喉を通る空気の音。骨がミシミシ言う音。骨が折れたんですよ！折れて、痛くて、苦しくて、涙が出て、だけど手は離してくれなくて。それで、それで藻掻いて、暴れて——」

「そんな腕になった」

「挟ってました。布団に赤いシミがついてました。爪の間に肉が挟まって、それを取るのが大変だった……」

性根尽き果てた彼女の、ぐったりとした姿だけが残っている。その魂の訴え。私はそれを聞き逃さない。

「モエさんは、もう嫌なんですよね。そ

んな夢は」

「——はい」

「その前のやつも？」

それは違う、と彼女は言いたげだった。
けれど飲み込んだのだろう。

「いいえ」

「わかった。ありがとう。私たちがなん
とかするから」

私はモエの肩に手をおいた。だいぶ前に、
アヤメにされたことだ。いきなりの温さ
に、モエの体は少し栗立ったのか、振動
を感じた。

「そうだよ！ 任せて、私たちがきつと
——」

「あなたの夢を解決してくれる人を紹介
してあげるから」

「えっ、アヤメさん」

かろうじて、隣に座る私にだけ聞こえる、
小さな声だった。困惑するセレナをよそ
に、アヤメはモエの前にかがみ込んだ。

「まあ正確には、夢を治してくれる人に、
あなたを紹介するって感じかな」

「夢を、治す？」

「そう、だから心配しないで」

「お願いします」

モエは涙目になっていた。そんな彼女を、
優しく抱くアヤメ。私たちとは全く違う。
同年代の人間には出来ない、彼女の励ま
し方。それは私のそれよりも、よほど効
果的なのだった。

「あと、部屋の鍵は開けといてね」
「どうして……」

「鍵は、夢の中に入るのを妨げるの。その人が言ってた」

「わかりました」

赤目を掻きながら、彼女は答えた。

「よし、それじゃあ、今日はここまで。」

明日また会いましょう。明日はきっと、いい夢を見れるはずよ」

「はい」

その声は、震えていた。

「今日の夜、やるんですか」

帰り道、私はアヤメに聞いた。

「ええそうよ」

「わかりました」

彼女は少し黙って、それから話を続けた。

「それと、みんなに心してもらいたいこ

とがある」

「強いつて、ことですか」

「セレナは感がいいのかしら。そうよ。今夜の悪夢はかなり手強いかもしれない」

「私たちに務まりますか」

率直な感想だった。今の私たちは、それなりの経験があると言つても、彼女には足元にも及ばない。屠ることのできるの
は、せいぜい雑魚程度だ。

「分からない。やってみないとね」

「そんな……」

「大丈夫よ。そんな顔しないで。私たちは何度も狩りをやってきた。一人よりも二人、二人よりも三人。今の私たちならできる。私は、貴方達を信頼してるから」
いつもより慎重な言葉選びだと感じた。

「がんばります。私、今日は覚悟決めます」

セレナの物言いは重々しかった。

「私です。精一杯努力します」

「うん、ありがとう」

それじゃあ、と彼女は改札をくぐった。

電車の時間が来たのだ。アヤメの乗る電車を見て、流れていく窓から彼女を探そうとした。残ったのは背景だけだったが。

私たちも行こう。

私たち二人はそれぞれの帰路についた。

1・2

(1)

今回はかなりの手応えがある。彼女はそう思った。狩りの夜に没入するための儀式。ベッドがことごとく液化したように、沈んでいく体を抱いて、目を強く瞑る。漂白されていく意識が、彼女の心を強くしていく。現実の雑念を払い、彼女は狩人になるのだ。

今夜の空気は冷たい。春の夜だと油断していたようだ。彼女が目覚めたのはもちろん校内で、教員用の駐車場だった。

「誰も居ない」

珍しく、彼女が先着だった。いつもは、偶然かもしれないが、彼女は二人の後に

目覚めていた。それだけ彼女がこの狩りに意気込んでいるという現れか。見回りとはいかないものの、試しに周囲を見渡してみる。動いているものはないか、ひと目を気にする必要はないが、悪夢が今どこにいろのかを注意する必要は十分にある。だが見つけられなかった。このまま一人で、モエの部屋まで行こうかとも考えたが、それは過ちだろう。彼女は待つことにした。

「早いわねカナン」
アヤメが来たようだ。

「こんばんは、アヤメさん」
「こんばんは」

習慣的な挨拶は、やはり心の平穏を期待

してのものと、彼女はようやく理解できた。何気ない言葉だが、その響きはやはり安心できるのだろう。今夜は尚更だろう。

「少し探してみたんですけど、悪夢はどこにも見つかりませんでした」

「でしょうね。こんな見通しのいい場所には隠れられない。おそらくは、モエの部屋ね」

「私も、行こうとしたんですけど、やめたんです」

それとも行くべきでしたか、と彼女は付け加えようとした。

「賢明な判断ね」
「モエさんは、いまどうなってるんですか。今もやっぱり、悪夢を見ているんで

すか」

「さあね。まあ、よくはないでしょうね。

けど焦らないで」

「はい、気をつけます」

「こんばんわー」

セレナもやつと来たようだ。

それに合わせて、いつの間にかアオタがアヤメの肩に乗っている。カナンは狩りを繰り返すほど、アオタという存在のどこか不自然な感覚を覚えていた。と言っても、彼を不信しているわけではない。ただどこか、会話や行動が人間というものに噛み合わない気がするだけだと。一個の人格として受け止めていいのか、考えあぐねているのだ。だがそれは、問題にするべきではない。カナンのアオタに

対する好感度は決して低いものではないし、むしろ並大抵の人間よりは高いだろう。だから今はやめよう。そう思った。

「前も言ったと思うけど、今夜の獲物は厳しいものかもしれない」

アオタが続いた。

「アヤメの言う通りだね。今夜は不吉な予感がする。並々ならぬ気配を感じるよ」これも、最近わかったことなのだが、どうやらアオタは気配を感じられるようだ。それにアヤメも。熟練した夢の住人にとつては、それは基本的なものなのだろう、そう彼女も考え、密かに懂れていた。それはセレナも同じで、だから二人は感覚に頼ることを良しとしようとしない。しかし気配というものが、経験則に基づい

ているのではないかという考慮はないようだった。

「私たち、どうすればいいの」

「そうだね……セレナとカナンは、うーん難しいね。経験は十分だと思うけど、今夜の敵は」

「ついてきなさい」

「アヤメ！」

「いいでしょ。彼女たちももう素人じゃない。その武器の使い方も十分わかってる。使えない戦力ではないわ」

「そうそれはそうだけど、早すぎる」

「何事も経験でしょう。貴方達も、大丈夫だね」

「はい！」

「はい、大丈夫です」

「ほら、こう言ってる。それはいざとなれば私でなんとかする」

「そうかい。そこまで言うのなら、止める理由はないね。僕はもう何も出来ないから、せめて君たちの狩りの成就を願ってるよ。——がんばって」

彼女たちは、女子寮へと向かった。

(2)

女子寮は最近建て替えられたらしく、男子寮に比べれば綺麗だった。新築から数年たった様な、まだかろうじて若いアパートの様な外観だ。タイル張りの外観が、他の建築物との毛色の違さを引き立たせている。その中の二階に、モエの部

屋はあるらしい。三人はもちろん寮生ではないので、寮の中には一度も入ったことはない。いわば別世界だ。同じ敷地内にありながら、立ち入ることを禁じられていた場所だ。カナンとセレナの、若干の興奮はしょうがないだろう。寝静まった夜だ。物音を立てないよう、慎重に足を運ぶ。もちろん声も囁き程度だ。

「ここじゃないですか？」

カナンが指をさす。

ドアノブを回す役割は、やはりアヤメが担うようだ。

「開けるわよ」

ゆっくりとドアを開く。鍵はかかっている。彼女の部屋で間違いなかった。徐々に見える間取りは、単純な構造だ。しか

し、肝心の彼女の姿は見えなかった。丁度死角になっているのだ。アヤメは先陣を切って、モエの部屋の中へ進む。慎重に、慎重に、中腰のまま移動していく。

それに続く二人。ここまで来ると、緊張はごまかしきれない。あの時、一番はじめの遭遇の記憶が、再び脳裏に過るのだ。それはあからさまに歩調へと現れていく。アヤメは着実に進んでいくのに、二人との距離は離れるばかり。

アヤメが静止を促した。音を聞けと合図をする。私たちは耳に集中する。カサカサと音が聞こえる。布団が擦れる音だ。私は思い切って壁を離れ、モエの姿を捉えようとした。

私はそれが過ちであることを、すぐに自覚した。

——目が合った。

モエの上に浮かぶ、水滴を逆さにしたような体の悪夢。その体から生える細長

いては、彼女の首を締めていた。——いや違う。彼女は彼女の手によって、首を締められている。悪夢はその腕を掴んでいるだけだ。彼女の傷の理由がわかった。まるで操り人形の糸を手繰るように、

彼女の手を右往左往させている悪夢。私は戦慄した。ここまで人間的な動きを、悪夢がするという事実。いままでの個体は、すべからず獣だった。動きも、感覚も。それが私たちの『獲物』だ。だがあれは違う。知性を感じる。それも狡猾

なもの。

今それと目を見合わせてしまったことは、十分に私の体を凍結する理由になりえた。

先に動いたのは悪夢の方だった。自らの危険性を察知したのか、浮遊した体を地面に落とし、手足を更に生やした。怒濤の進撃が始まった。悪夢はアヤメを躲し、ドアを開けて出ていこうとする。

「撃ちなさい！」

アヤメが叫んだ。

しかし動転したカナンが、その震える手を抑え、引き金を引ける体制に持つていくまでに、悪夢はドアを開けきり、外に飛び出していった。バン、バン、バン。

三発撃ったが、まるっきり当たらなかった。

「ああ、どうしよう」

外したことで、音を立てたことで、彼女は身を晒してしまうことに慌てふためいていた。

「武器の音は聞こえない。ほら、早く！」

アヤメは二人を急かした。セレナはそれを汲み取り、カナンを立たせ、悪夢を追おうとする。

「ほらカナン、立って」

押されるカナンも、気を取り戻し、走る足に力を込める。こんなことで、ヘナヘナしている暇はないのだと。

「セレナ！ これ」

板状の物体が投げられた。

「おっと」

なんとか落とさずに取ることが出来た。

「携帯？」

「連絡用。何かあったら電話して。こっちからもするかもしれない」

「わかりました」

携帯をポケットに入れ、セレナはカナンを追いかけて、寮を飛び出した。

残されたアヤメは、部屋を見渡していた。眠っているモエ。その腕を縛った。

自傷を防ぐためだろう。

そしてなぜか、窓を開けた。冷たい風が流れ込み、カーテンがなびく。

そしてアヤメは、わざわざその窓から外へと出ていった。

(2)

逃走劇は長く、二人は走りっぱなしだった。悪夢は明らかに、撒こうとしている。

角をいきなり曲がったり、わざわざ室内に入り、彼女たちに行方を攪乱しようとしている。だがそれで諦める二人ではなかった。

横腹が痛む。その痛みを抑えながら、なおも走り続ける。

半屋外のような通路で、そのときは満ちた。

先にしびれを切らしたのは、悪夢だった。急回転し、彼女たちの方向を見る。

大きな手を広げ、ムチのようにそれを振るう。――受けきれない。そう判断した二人は滑り込み、攻撃を避けた。セレ

ナは無事だが、カナンは違った。腕と脚。腕の方は悪夢のせいで、脚の方は擦りむいただけだ。だがそれは十分に、空きとなりえた。

「クソが！」

カナンには珍しい暴言とともに、銃を乱射する。擦り傷など構わず、感情に任せ撃っている。一発一発、手に反動が返ってくる。連射は相当な負担だった。けれどその効果はあったようだ。何発かは悪夢に命中し、それは大きな悲鳴を上げている。耳鳴りの様な、不快な高音。

またとない好機だ。

「まだまだ！」

セレナが走り出した。それはもう、全速力で。黒い染みをたどっていく。どうや

ら血のようなものを流しているようだった。痕跡をたどり、前方を見れば、そこはまたあの寮だった。

「アイツ！」

悪夢は壁をよじ登っていた。必死に、向かう先は決まっている。モエの部屋だ。セレナは迷うことなく、寮の入り口へ向かうとする。

「待って」

それを、アヤメは引き止めた。

「アヤメさん！ そんな場合じゃないですよ。早く助けに行かないと！ モエちゃんか」

「もう手遅れよ。どうもできない。それより次の一手を考えるべきよ」

「そんな……」

「カナンは？」

「M科の扉の前に、たぶん」

「急いで行って、早く」

「はい、行きます」

明らかに不服だった。それでも、アヤメには何か魂胆があると信じているようだ。彼女は来た道を折り返し、カナンの元へと走っていった。

「あれ、どうおもう」

「どうしようもないね。手遅れだ。でも完全には消化できてないから、今夜中に仕留められれば、なんとかなるかな」

またいつの間にか、アヤメの肩にはアオタが乗っていた。それぞれの視線は空いた窓に向かっている。

「でもそれで、やりやすくなるでしょ」

「まあ、あれだけ太ればね」

その瞬間、夜空には大きな音が響いた。女性の悲鳴に似たそれは、けれど無機格的だった。

「出てきた」

悪夢が窓枠からはみ出してきた。まるで、カタツムリがその貝殻より顔をだすように、或いは太りきった体を狭い空間から逃がすように、悪夢はその図体を背負い、這い出て、見上げる星空へ吠えるたてる。

まるでカエルだ。だらしなく飛び出た腹を抱えて、その巨体は動き出す。

その姿は当然、セレナやカナンにも捉えられていた。

「なにあれ」

「わかんない」

だが悪夢であることは明白だし、彼女たちも理解していた。それでも信じようとならない。あの巨体なら仕方のないことだろう。あれを相手にできる狩人などいるのだろうか、そうカナンは疑問に思った。

強い意思だの心の平穏など、もはやどうでもよかった。放心した心には、あの悪夢は刺激的、印象的すぎる。

「ねえ、どうすればいいのカナン！」

「知らないよ、わかんないよ」

「そんな、でも——」

うわ、と二人は飛び上がった。携帯のヴァイブレーションだった。震える手を抑えて、セレナは電話に出た。

「聞こえる？」

「はい、聞こえます」

「それじゃあ一回カナンに変わってくれないかしら」

「わかりました」

「えっ、わたし？」

「うん、はい」

「もしもし、カナンです」

「よく聞いてくれるカナン？」

「あ、はい。聞きます」

「カナンにはもう一つ銃があったでしょ」

「はい、あります」

でも一度の使ったことがない。彼女に不安がよぎる。

「それを使うときが来たのよ」

「え、でも私一回も……」

「使い方ぐらいもうわかってるでしょ」

「そうれば、そうですけど」

「シャキッとしないさい！」

「は、はい」

「いい、これを頼めるのはあなただけよ。

私の弓じゃ威力がないの。カナンの狙撃じゃないと、アレを倒すことは出来ない。

カナンしか居ない。それをわかって」

「でも、私、出来ません。あんな大きいやつに」

「でかいだけよ。見なさいあのノロマを！」

ちらりと悪夢に目をやるカナン。

「見ました」

「どう？」

「怖いです、大きいです！」

「それだけよ。すばやくもない。あなたは遠くから銃を撃つだけ。誘導は私たち

「がやるから。ね？ やる気をだして！」

回答が返ってこない。だめか、とアヤメは諦めかけようとした。だがカナンは、期待は裏切らなかった。

「はい、やります。がんばります。だからどうすればいいんですか！」

力いっぱい叫んでいる。彼女は決めているのだ。狩人になった時から。自分を変えてみたいと。意気地なしな己を、乗り越えたいのだと。

「いいわよ、その調子。それじゃあ、カナンは駅に行ってくれない？」

「駅って、あそこですか」

カナンが想像したのは、登下校に使う最後の駅だ。

「そう。その連絡橋。そこで待ってて」

「連絡橋って？ 高くないですか？ 私

まだ」

「飛べるか飛べないかなんて考えない。やってみなさい。それからよ。それに飛

べなくてもよじ登れるでしょ。とにかくそこで準備してて。アオタと一緒にいるから」

「そうだよ」

携帯を当てている耳の、反対の耳からの音。紛れもない彼の声

「う、うわあ」

アオタが肩によしかかっていたのだ。

「いるでしょ。それじゃあお願いね」

セレナに変わって、そう言ってカナンへの指示は終わった。

「